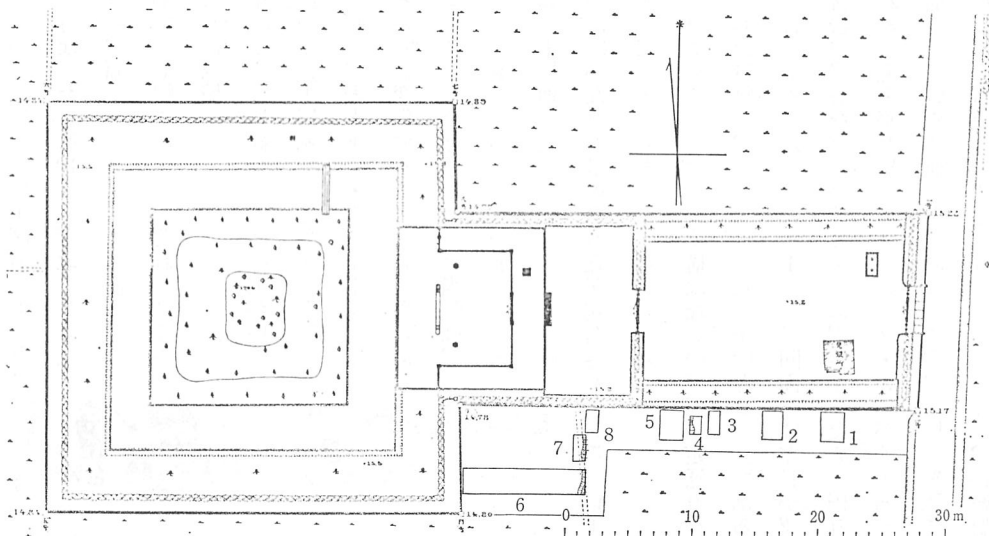


いるものが多い。なお、若干の燧瓦が含まれていることを付記しておきたい。

(土生田純之)

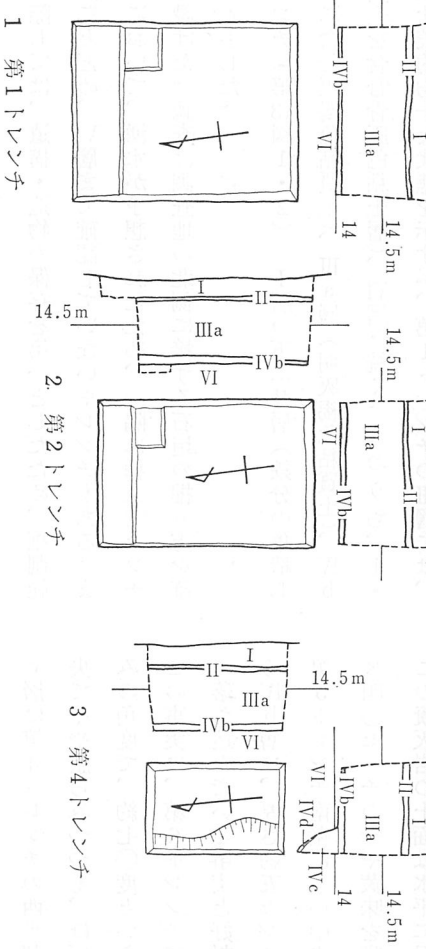
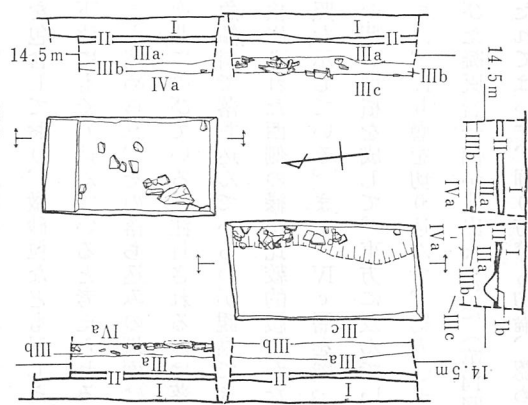
成菩提院陵駐車場整備工事区域の事前調査

伏見西部の土地区画整理に伴う土地交換によって、白河天皇成菩提院陵の脇に新たに取得した駐車場用地に、盛土工事を実施することになり、京都市文化観光局長の依頼に基づいて、事前発掘調査を実施した。調査期間は、昭和五十五年十月二十一日から三十一日までである。調査区域は拝所の南側に小土堤を挟んで位置する「」字形を呈した区域、約百七十五平方メートルである(図版三二)。当地は最近まで水田として利用されており、調査時には、その名残りをとどめつつ、東側の歩道と排水溝に接する部分に一部客土されていた。付近には、この白河天皇陵の他にも鳥羽天皇陵、近衛天皇陵が位置しており、巨視的に見れば、応徳三年(一〇八六)七月から造営に着手された鳥羽離宮跡に包含されている。今回の調査区域の近辺においても、京都市埋蔵文化財研究所によって鳥羽離宮に関連すると思われる数多くの遺構・遺物が検出されており、今回の調査の関連で参考とすべきところが多い。調査に際しては、京都市埋蔵文化財研究所長杉山信三氏および同研究所員に御指導・御教示を賜わった。

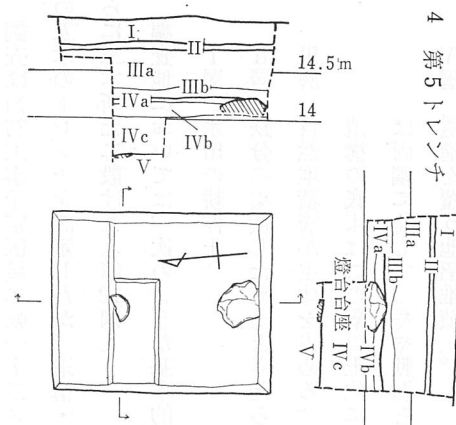


第12図 成菩提院陵駐車場トレンチ位置 (1/600)

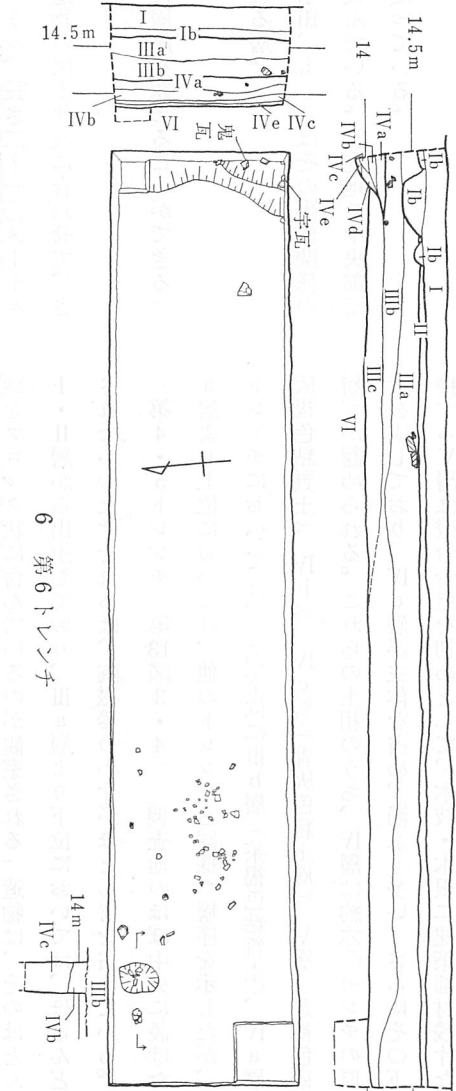
5 第7トレンチ(南)・第8トレンチ(北)



4 第5トレンチ



6 第6トレンチ



第13図 成善提院駐車場トレンチ平面および断面 (1/80)

調査は当初工事予定区域に幅一〇メートル、長さ二一〇メートルの五本のトレンチを設定したが、遺構・遺物の出土状況に合わせて、さらに三本新たに設けた(第12図)。

調査地においては、次のような基本的な層序を認めることができる。

I層 水田の耕作土。

II層 鉄分の集積した床土と考えられる層。

III層 自然堆積層が主体を占める。水田、もしくはその裏作関係の遺構の底床はこの層の上位に及んでいる。調査地の中央部では両端に比して、やや軟弱となっている。

IV層 遺構を覆う池沼堆積土。

V層 遺構を覆う有機物堆積土。

VI層 かなり硬い粘質土層(地山と考えられる)。

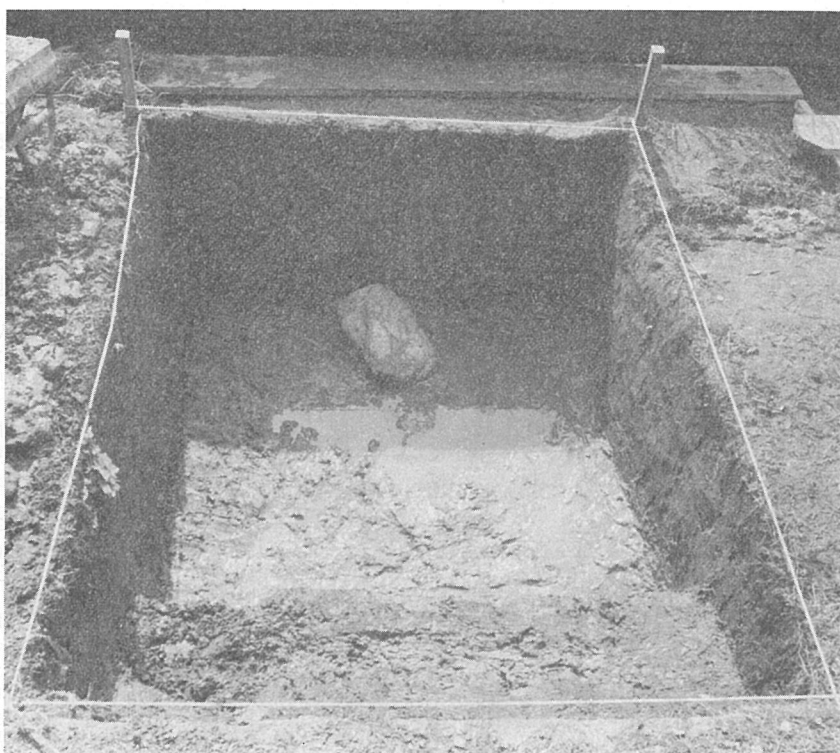
なお、調査に際しては、遺構・遺物の保存を第一としたため、掘削範囲は必要最小限にとどめ、VI層まで確認していないトレンチもある。また、各トレンチにおいて、湧水が予想されたため、一隅に約三〇センチ四方の排水枡を設けた。調査は調査地の北側に接する石垣の掘り方を確認することから着手した。

第1～3トレンチ(第13図1・2) I層の下にII層(鉄分の集積した薄い層を下位に含む灰褐色粘質土)、III a層(明灰褐色粘質土)、IV b層(黄褐色砂質土を含む青灰色粘土層)、VI層と続く。このうち、I・II・IV b各層は比較的均一な状態を示すが、第1トレンチのIII層には、

砂をブロック状に含んでいるのが観察される。遺物は、そのほとんどがI・II層から出土しており、III a層より下位においては、ほとんど検出されなかった。それらは、陶磁器の小片がほとんどを占めている。

第4・5トレンチ(第13図3・4) 調査地のほぼ中央に設けた。III a層より上位においては、他のトレンチと同様の層序を示したが、第5トレンチにおいては、その下位にIII b層(茶褐色粘質土)、IV a層(暗灰褐色粘質土)、IV b層、IV c層(青灰色粘土層)、V層(茶褐色砂質土層)が認められる。これらの土相のうち、IV層は約六〇センチの厚い堆積を成しており、IV c層が主体を占め、湧水も多い。さらにその下位に接するV層は燈台台座を初めとして、木枝・木根に建築部材残片などの木製品を加えた多くの有機物を包含しており、微砂粒なども混じっている。VI層は、さらにこの層の下位にもぐり込んでいると考えられる。IV c層は第4トレンチの西半部でも認められ、その落ち込みの端面は、中央でやや膨らみつつも、ほぼ南北にのびている。注目されるのは落ち込みの角度で、約七〇度という急傾斜で落ち込んでいるのが観察できる。この事実、第6トレンチで検出された西側の縁が比較的緩やかな傾斜で落ち込んでいる事実と対照を示している。また、IV c層を覆っているIV b層は、厚さ約五センチの薄い堆積を成して、東方に及んでいる。第5トレンチ南壁に近い中央では、IV b層を切り込んで、約五〇センチ×四〇センチのやや黄味を帯びた凝灰岩一個が検出された(第14図)。この凝灰岩の上面は水平に保たれてはいず、掘り方等も勿論、認められ

なかった。第4トレンチから出土した遺物は少ないが、IVb層とその下に薄く堆積したIVd層（灰褐色粘質土をやや多く含む青灰色粘土層）との間から検出された古墳時代の須恵器杯身破片（第15図12）は注意さ



第14図 成菩提院陵駐車場第5トレンチ凝灰岩出土状態

れる。同様の時期と考えられる須恵器小片は、第5トレンチIIIa層からも出土している。IV層からは、他の土相に比べて瓦類を中心とした多くの遺物が検出された。

第6トレンチ（第13図6） 調査地の南端付近に東西に設定したトレンチで、当地は、本来は第1～5・8トレンチを設けた水田とは区画を異にしていた。I層を剥いだところ、ほぼ南北にのびる幅約二五センチ、深さ約一〇センチの溝2本と幅約八〇センチ、深さ約二〇センチの溝が相接近して検出された。水田もしくは、その裏作関係の遺構であろう。さらに掘り下げていくと、地表下約三〇センチで人頭大の花崗岩（白川石）、半截された扁平な川原石、小石などがレベル差約二〇センチの範囲にまとまって、北西から南東方向にのびているのが検出された。これらは層位的には、IIIa層に含まれるものである。花崗岩は、いずれも著しく風化しており、一部は砂粒の塊と化している。ここには、一片の瓦片も混じえてはおらず、この点で第7・8トレンチにおいて一〇～二〇センチ程下のレベルで検出された列とは性格を同一視できない。IIIa層においては、径約二〇センチ、深さ一二センチのピットと深さ約一〇センチの浅い土壇が各1個検出された。土相はIIIa層、IIIb層、IIIc層（明茶褐色粘質土）、VI層と変化していくが、トレンチ東端付近で、IIIc層から東方に傾斜する落ち込みが確認された。この落ち込みは、さらに二〇センチ程下位のVI層に達すると傾斜を交換し、より緩やかに傾斜していく。第4トレンチで検出された落ち込みに対応するものは、傾

斜角の相異はあるものの、IV層を切り込んだ落ち込みと考えられよう。とすれば、この段階では、幅約八メートル、深さ〇・五メートル以上の溝状のものを想定することができよう。溝状のものが、大溝となるのか、付近に多いとされる池の入り江の如きものになるかは限られた調査範囲においては断じえない。その後、IIIc層が堆積しているが、同じく東端を溝状の遺構で削られている。IIIc層は、本トレンチ、および第7トレンチで確認された。IIIc層の直下には、VI層が展開している。VI層は北西に向かってやや高くなっているが、このVI層の傾斜に沿って土師器破片が散乱しているのが確認された。破片の一部は、径三二〜四三センチの楕円形を呈するピットの覆土上部から出土している。このピットの覆土は、そのほとんどがIVc層より成っており、深さ約七〇センチまで掘り下げたが、底床には達しなかった。

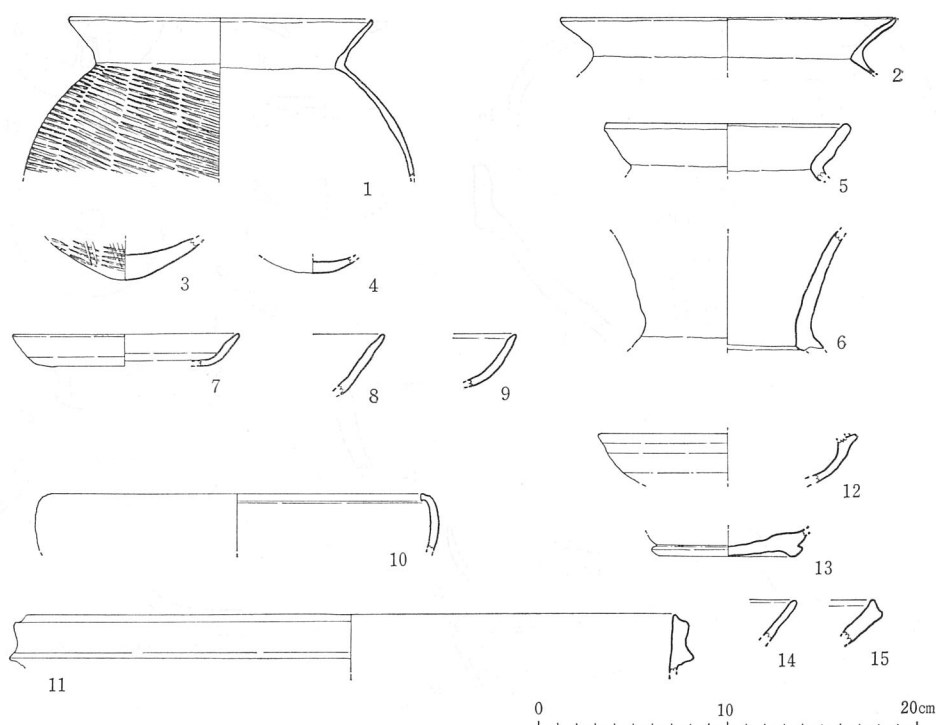
出土品は、比較的広いトレンチに比しては少ない。ややまとまって出土した遺物としては、VI層上の土師器破片、および東端付近の溝状遺構の覆土最上部IVa層から出土した瓦片などがあげられる。

第7・8トレンチ（第13図5） 第6トレンチで検出された溝状遺構の西縁の追求のために設けた小トレンチである。いずれもIIIa層までは、標準的な堆積の状況を示している。第7トレンチでは、I層下に第6トレンチで検出された溝の続きが検出されるとともに、地表下六〇センチ前後のところ、つまり、IIIb層において、瓦片、割石などで構成される列が、ほぼ南から北に、それから東に方向転換してのびているのが

認められた。密度的には、第7トレンチ北半が最も密であり、第8トレンチでは、かなり疎になっている。第6トレンチで検出された溝状遺構の西縁は、第7トレンチでもほぼ南北にのびているのが確認された。この縁の内面に、ほぼ縁に平行して前述の瓦片などで成る列があることもあって、調査はその下位まで及ぼしてはいない。今回の調査区域を最近まで画していた水田の畦畔は、この溝状遺構・瓦片などより成る列の直上に近く位置していたことにも注意しておきたい。

出土品としては、列を構成している瓦片二二がほとんどで、これに若干の須恵器・土師器片が加わる程度である。

以上のことをまとめてみたい。今回の調査地は御陵付近から緩やかに傾斜し、裾付近では、ほぼ平坦な低地をなしていたと推察される。このような自然的条件のもと、古墳時代初頭に人々が生活空間の一部として利用したのは、やや高くなった地点とその周辺であった可能性もあるが、検出された古式土師器は別の地点から流れ込んだ可能性も考慮されねばならない。この段階で既に溝状遺構が存在していたのか、新たに掘削されたかは明らかにしえない。しかし、今回の調査範囲においては、平安時代後期から鎌倉時代初頭には埋没していたと推察できよう。この埋没の原因が、人為的なものか否かについても即断しかねるが、IVc層から出土した瓦片、その上位の列を構成する瓦片から推して、前者の可能性が高いように思う。その埋没後も低湿地もしくはそれに近い状態にあったと考えられ、本来の溝状遺構の中央部に凝灰岩一個が置かれた。

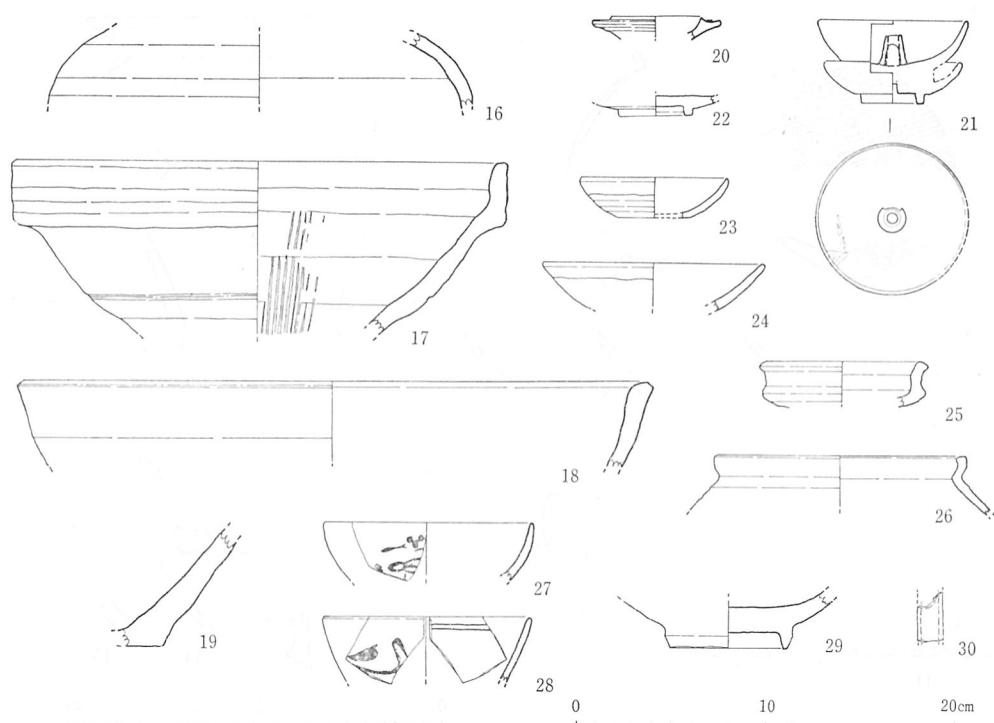


第15図 成菩提院陵駐車場出土品(1) (1/4)

溝状遺構の西縁上で検出された列もこの凝灰岩と関連づけて考えるべき性格の遺構であろう。ただし、両者はレベル的に二〇センチ前後の差があり、これが時期差を示すのか、別の要因によるものかは詳らかにしない。その後自然堆積、もしくは客土され、近時まで、その自然条件を生かして水田として利用されていたと考えられる。

調査による出土遺物は、四〇二点を数える。主体はⅠ・Ⅱ層から出土した近現代の陶磁器片で、土師器・須恵器片が続く。以下、各遺物について概略を記したい。なお、陶磁器関係については、東京国立博物館林屋晴三氏に、また、木製品についても、東京国立文化財研究所中里寿克氏および国立科学博物館山内文氏に御教示を賜わった。記して感謝したい。

土師器（第15図1～9） いわゆる古式土師器と平安時代以降の土師器に分けられる。前者としては、甕・壺がある。甕（1・2）は、ほぼ二個体に復元できる。ともに、やや蛇行気味に外反する口頸部を有し、端部は外上方へつまみ上げている。胴部外面には、右下がりの平行叩きを施す。内面の調整手法は不明。3・4は甕の底部である。若干平底の傾向をとどめるが、ほとんど丸底に近い。3の外面は右下がりの平行叩きを施した後に、縦方向に叩き及び刷毛目を加えて仕上げている。色調・焼成から判断すると1は3に、2は4に伴うものと考えられる。6は大きく緩やかに外反する口頸部を有する壺の破片。5は「く」の字状口縁を示すやや肉厚の製品である。端部は磨耗しているため本来の形状



第16図 成菩提院陵駐車場出土品(2) (1/4)

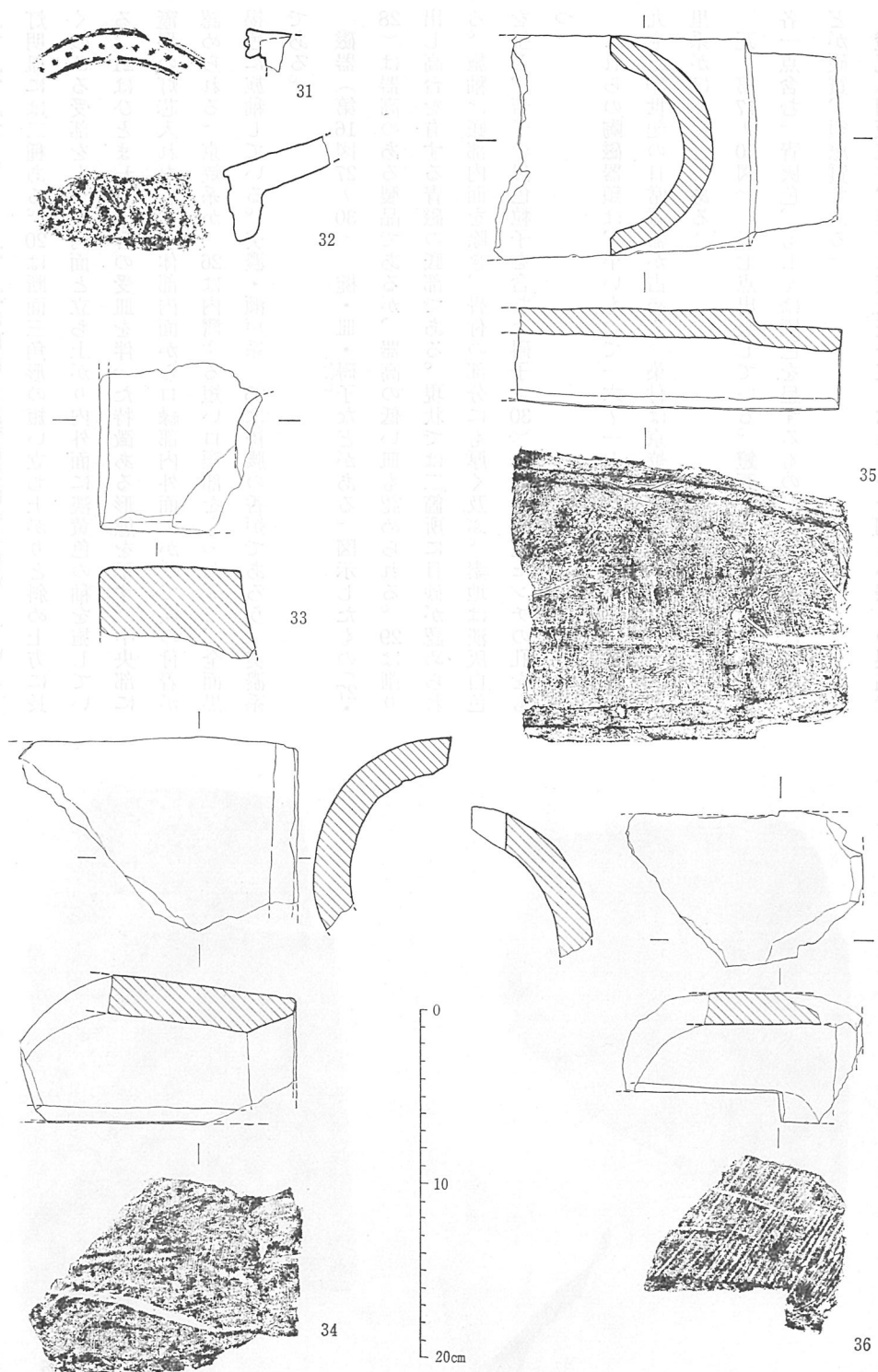
は不明。壺か。これらの土師器、とりわけ、甕は庄内式に含まれるものであろう。後者に属する製品としては、皿・碗などがあるが、いずれも小破片で磨耗しているため、口径・調整手法などの明らかにできるものは少ない。色調は、乳灰色・淡褐色を呈するものがほとんどである。7は、体部と底部の境に淡い沈線を伴う。8は蛇行気味に斜め上方にのびる体部とやや内側に突出した口縁部を有す。9は、底部との境が不明瞭な碗であらう。口縁端部は尖る。

瓦質土器(第15図10・11) 出土量は一〇数点のみで、そのほとんどが鉢である。10の体部は内彎しつつ立ち上がり口縁部に続く。口縁部は内側に入り、端部に平坦面を有している。他に釜(11)の小片が認められる。

須恵器(第15図12・15) 量的には少ない。杯身(12)は立ち上がりを欠いている。杯部は深く、底部は篋削りである。13は短く外反した高台を付す杯である。杯(14)はまっすぐに斜め上方にのびる体部を有する。甕の口縁部とおぼしき製品(15)も出土している。

陶器(第16図16・26) 壺・瓶・甕・碗・皿・鉢・香炉などがある。

瓶(16)はやや肩の張った体部を有す灰釉陶器である。猿投産と思われる。搦鉢(17)の口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、幅広で淡い段状にカットされている。卸し目は、櫛目が九本単位で施されているが、その間隔は不明。口唇部および口縁部下面に重ね焼きの痕跡をとどめている。皿備前焼である。18は短く外反する口縁部を有す。19はその底部か。皿



第17図 成菩提院陵駐車場出土品(3) (1/4)

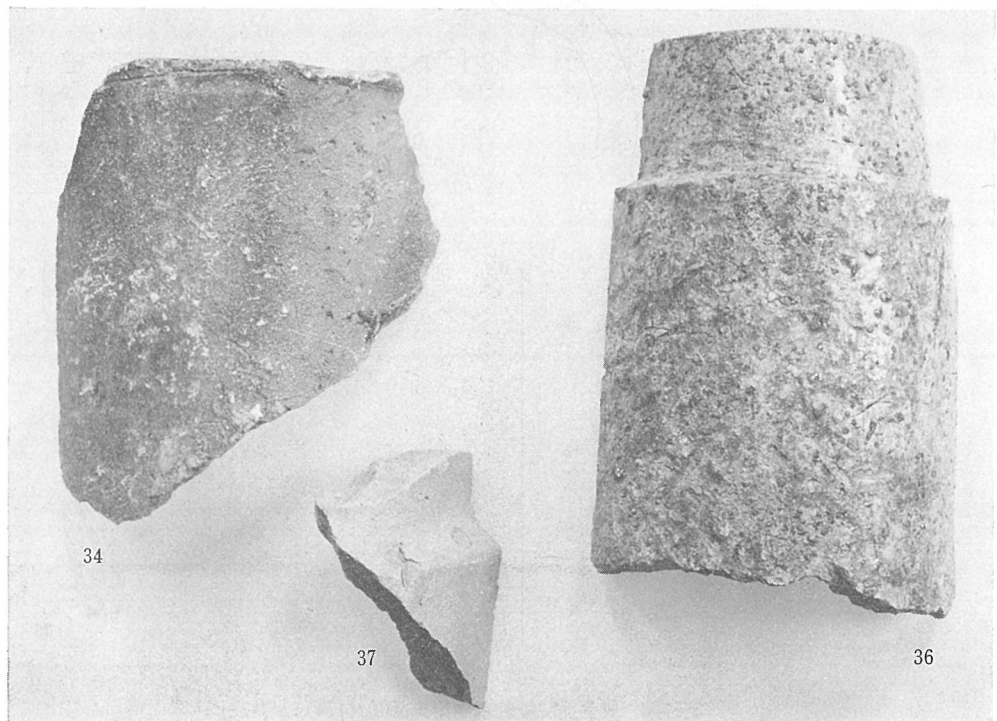
(22・23・24)のうち、23・24は内面と口縁部外面のみ施釉している。灯明皿には二種ある。20は断面三角形の短い立ち上がりで斜め上方に長くのびる受部をもつ。内面と立ち上がり内外面に淡黄色の釉を施している。21はひとまわり小形の受皿を伴った特徴ある形態を示す。中央部に竈形の灯芯入れを有し、体部内面から口縁部内外面にかけて煤の付着が認められる。京焼系か。26は内彎する短い口頸部をもった壺で、全面黒褐色に施釉している。美濃・瀬戸系。25は袴腰の香炉であろう。美濃系である。

磁器(第16図27～30) 碗・皿・^{がし}碁子などがある。図示したもの(27・28)は器高のある製品であるが、器高の低い皿も認められる。29は削り出し高台を有する青磁の底部である。現状では二箇所に目砂が認められる。施釉は底部内面を除き、畳付の部分にも厚く及ぶ。素地は淡灰白色を呈し、若干の黒色粒子を含む。碁子(30)は径〇・九センチの孔をもつ。

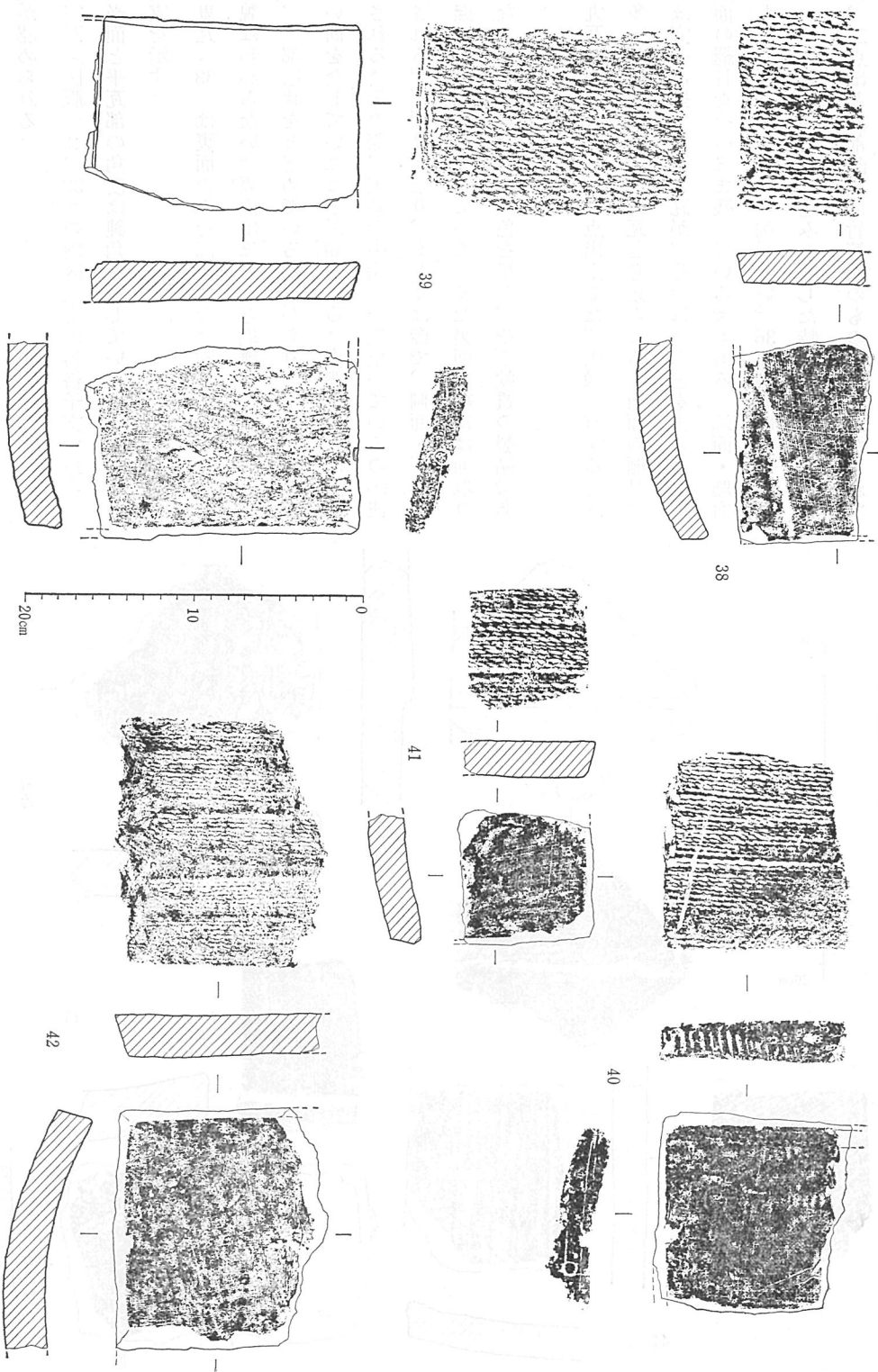
これらの陶磁器類は、早いもので一六～一七世紀の製品で、主体は一九～二〇世紀の日常雑器が占める。染付は京焼系、美濃・瀬戸系、伊万里系がほとんどである。

瓦(第17～20図) 五七点出土している。鐙瓦・字瓦・鬼瓦の破片を各一点含む。青灰色、もしくは灰色を呈するものが多く、焼成はほとんどが硬質、須恵質である。

鐙瓦(図版五2、31)は復元径一三・六センチを測る小振りの製品で



第18図 成菩提院陵駐車場出土品(4)



第19図 成菩提院陵駐車場出土品(5) (1/4)

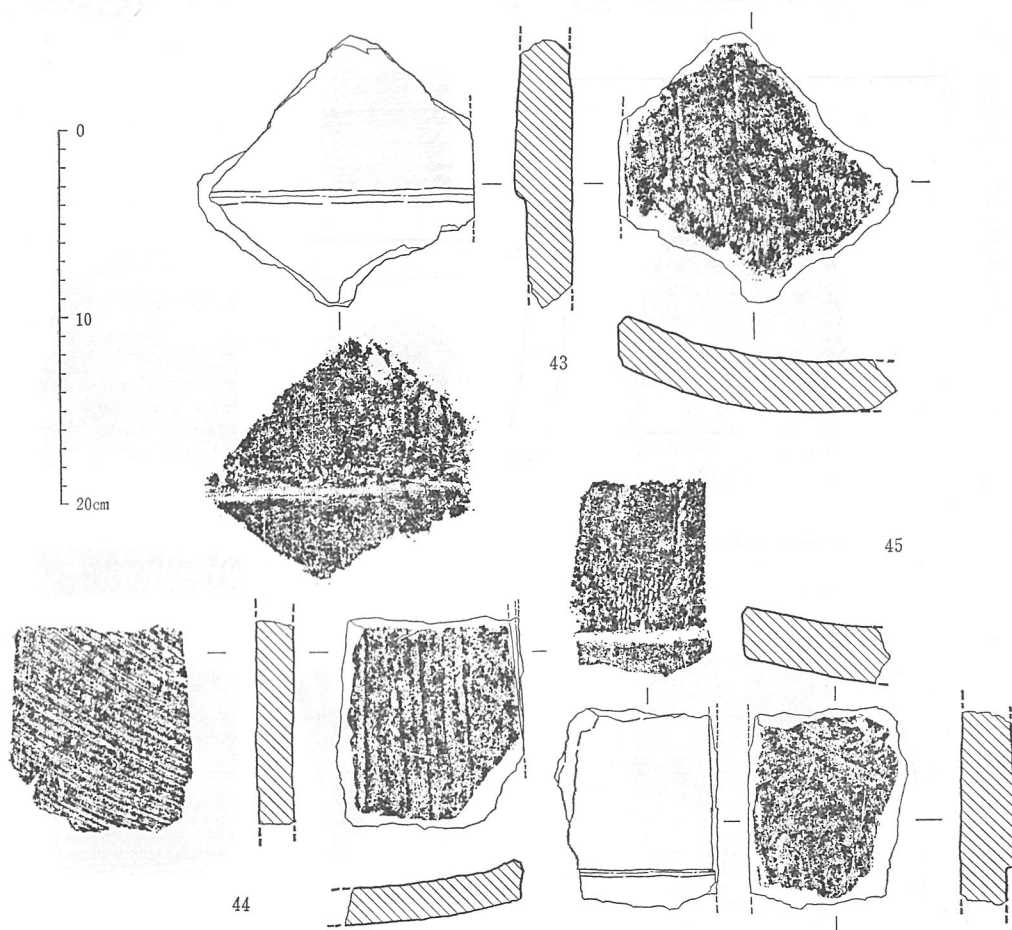
ある。高く突出した周縁の内に珠文を配す。部分的に灰釉が認められる。

宇瓦（図版五2、32）の内区主文は斜格子文である。

瓦当面と平瓦部の角度は鈍角をなしている。やや軟質の焼成を示す。

鬼瓦（33）は裏面のみを図示した。脚部のみの破片で面貌はわからない。表面はほとんど剥離している。しかし、一部原状をとどめている部分があり、本来凹凸の激しい面をなしていたことが知られる。内側の削りは篋削りされる。その際、工具を中途で一端止めているのが注意される。裏面は篋削り、もしくは撫で、側面・下端面は撫でによって仕上げている。また裏面側縁には面取りがなされている。淡黒灰色を呈し、やや軟質の製品である。

丸瓦（34～37）は一点出土した。玉縁を有する丸瓦が多いが、34は行基葺丸瓦と考えられる。凸面の縄目をほぼ完全に撫で消した瓦が、そのほとんどを占めるが、凸面の縄目をそのまま残している例もある。端面・側面ともに面取りをしている例が多い。36は側面に幅一・八センチの長方形の削り込みを有した特異な例である。また、二点ほど段部凸面に竹管状のもので押圧がなされて



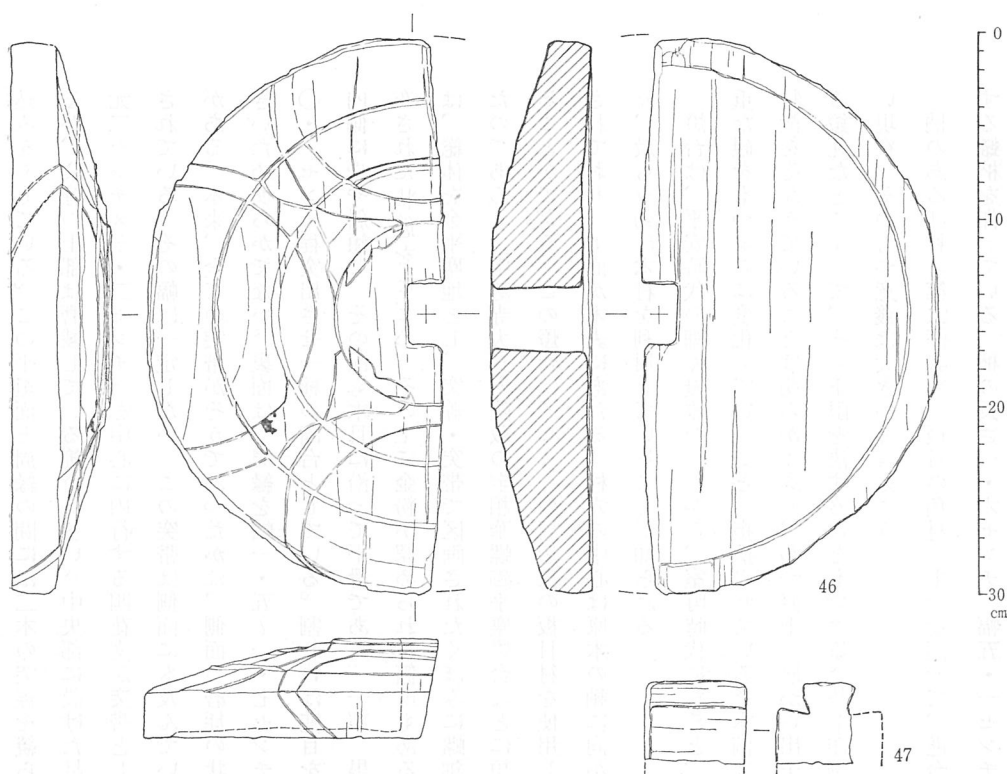
第20図 成菩提院陵駐車場出土品(6) (1/4)

いる小片が検出された(37)。圧痕の連続性は明らかでない。35には、ほぼ全面にわたって灰釉が認められる。

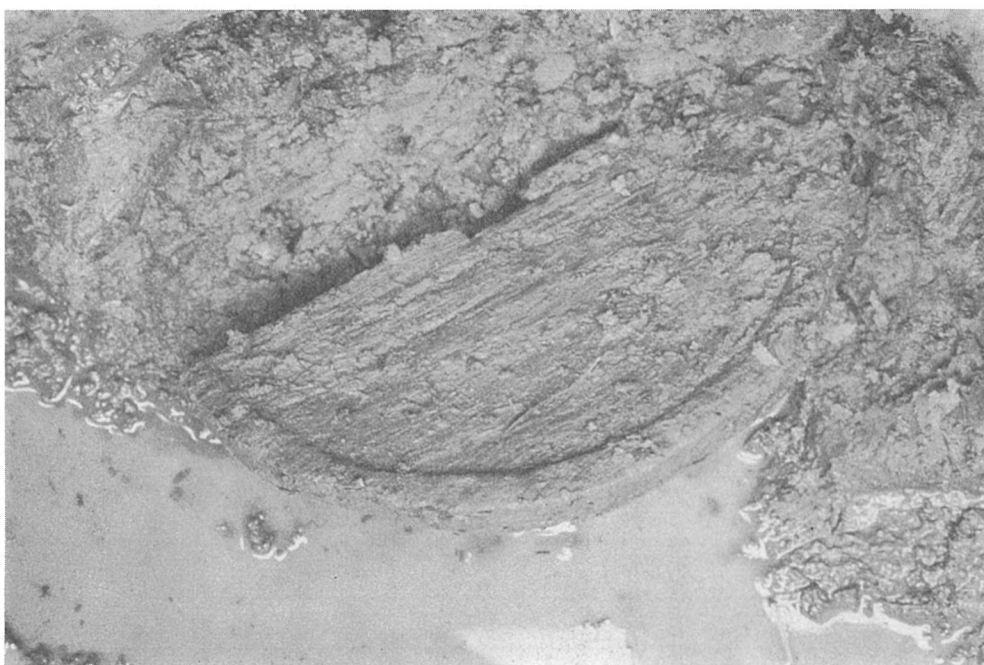
平瓦(38・45)には、通常の平瓦(I類)と凸面に五ミリ前後の段を有する、いわゆる有段平瓦(II類)がある。凹面の調整は、布目痕を残すものと撫で消したものが多い。凸面は縄目を残すものと撫で消すものが大半を占める。43はII類で凸面に布目が認められる例である。他に同様の方法で製作されたと思われる破片が一点ある。40は側面の調整に特徴を有し、端面には竹管状の圧痕がある。平瓦において竹管状の圧痕を有する例は、図示しえなかった例を含めて三点ある(39・40)が、いずれも広端面のみに押圧しており、圧痕の連続性は不明である。灰釉が認められる例も少なくない。

木製品(第21図) 第5トレンチV層から出土したものである。V層には、木製品を初めとする多くの有機物が包含されているが、上位で確認したのみで、下位はそのままの状態にとどめてある。

燈台台座(図版四・五、第21図46) 上面を下にした倒位置の状態で検出された(第22図)。底径二九・五センチ、厚さ二・二五・〇センチの緩い甲盛をもつ円盤である。半欠しているが、全体の形状はうかがうことができる。頂部には径九・六センチの平坦面を設け、現状では二箇所に変形M字形の浅い割り



第21図 成菩提院陵駐車場出土品⑦(1/4)



第22図 成菩提院陵駐車場第5トレンチ燈台台座出土状態

込みを有している。この平坦面と周縁の間には二本の突線を繞らせているが、突線の上部は磨滅している箇所が多い。中央部に設けた柱穴（復元二センチ×三・二センチ）を中心に内行する四花文が突帯として表出されている。その幅は一定しない。この突帯は側面にも及んでいる箇所がある。本来、全ての突帯がそうであったかは、側面の磨耗の状態が大きいため明らかでない。裏面は、周縁を幅一・五〜一・七センチ、高さ〇・一センチ程突出させ一種の高台としている。割れ口は榫目を示し、内側にやや斜傾し、その面も木目に沿って平滑である。一部、黒漆が塗布された状態をとどめ、その上に金粉が認められる箇所もある。本来は、総体を金平塵地とし、突線・突帯で区画されたくばみに螺鈿を施したのであろう。中尊寺大長寿院蔵の宝相華螺鈿平塵燈台などに類例を見ることが出来る。この燈台は、ヒノキの周辺部の板目材を使用して製作されており、上面が木表にあたる。柱穴の中心は原木の軸に向かっており、最も有効に木材を利用していることが知られる。

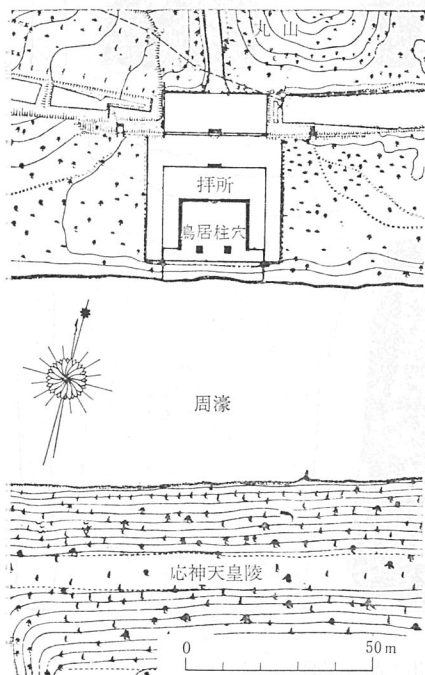
燈台は、平安時代の細く優雅なものから、室町時代になると、やや鈍重な観をもつものに変化していくことが指摘されている。^(註) 本例は前者の特徴をそなえていることは明らかであり、かつ直上の層から出土している鎧瓦などによって、その下限を決することもできる。基準作例の少ない現在、そのもつ意義は大きいと言えよう。

柄のある部材（第21図47） 板目の角材の上半を削って、逆台形を呈する蟻柄を作っている。柄の長さ一・六センチ、幅五・一センチ、厚さ

二・一〇二・七センチを測る。
調査は以上のような成果を得て終了したが、工事の性格が盛土工事という遺構・遺物に直接影響を与えるものではなかったため、工事は予定

出土箇所	出土層位	出土品実測図番号
第1トレンチ	I層	20・22・24・27・28・30
第2トレンチ	IIIa層	15
第4トレンチ	IIIa層	41
第4トレンチ	不明	16
第4トレンチ	IIIa層	29
第4トレンチ	IVc層	18
第4トレンチ	IVd層	12
第4トレンチ	IV層	11
第5トレンチ	IVb層	7
第5トレンチ	IVc層	31
第5トレンチ	V層	46
第5トレンチ	不明	25
第5トレンチ	I層	10
第5トレンチ	II層	23
第5トレンチ	IIIb層	1
第5トレンチ	IVc層	32
第5トレンチ	不明	14
第5トレンチ	IIIa層	9
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	34
第5トレンチ	IIIa層	17
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	36
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	40
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	43
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	45
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	47
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	37
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	38
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	26
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	21
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	13
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	6
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	33
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	35
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	38
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	19
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	8
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	28
第5トレンチ	IIIb層(瓦列)	30

成菩提院陵駐車場出土品実測図一覧



第23図 恵我藻伏岡陵調査箇所位置
(1/2,000)

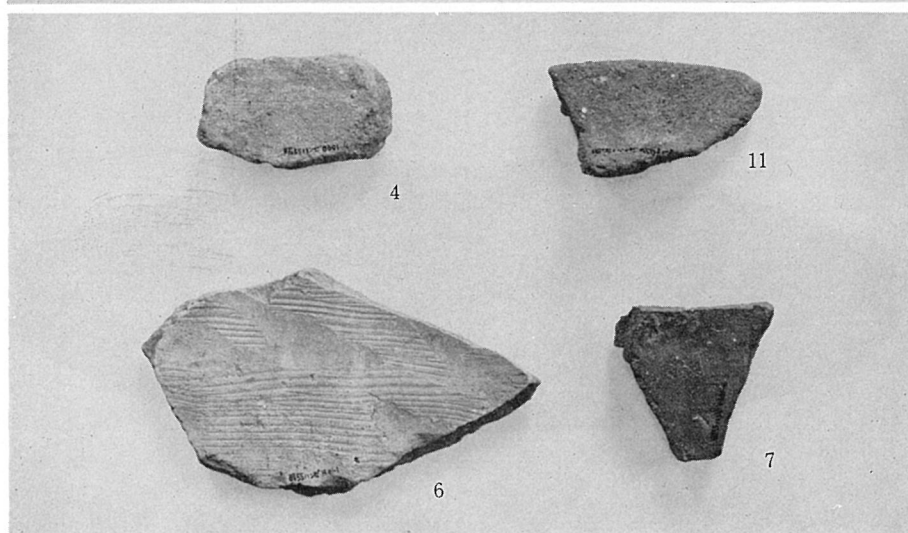
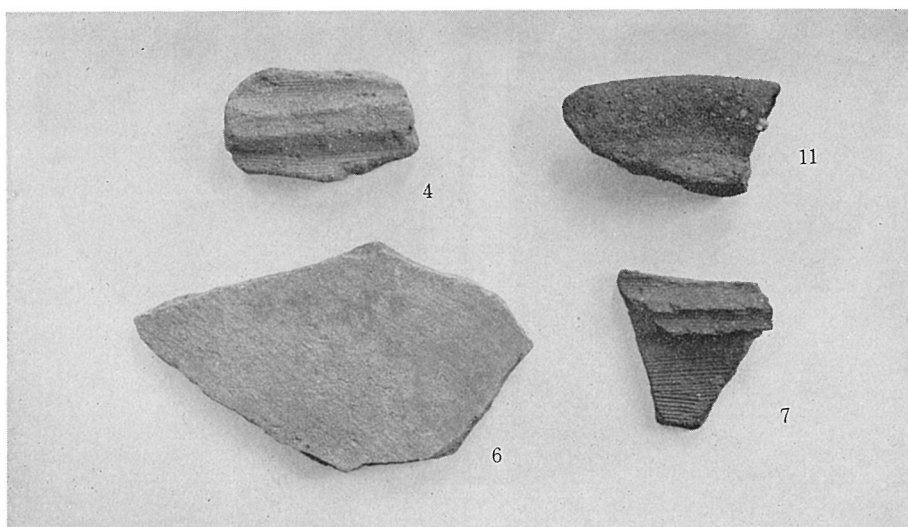
通り施工した。

註 中野政樹編「燈火器」『日本の美術』第一七七号 昭和56年(至文堂) 33
頁

恵我藻伏岡陵鳥居改修工事箇所の調査

応神天皇恵我藻伏岡陵の鳥居を改修することになり、昭和五十五年十一月二十六日から十二月二日にわたって立会調査を実施した(第23図)。掘削は従前の鳥居柱穴部二箇所(二メートル四方、深さ二メートル)

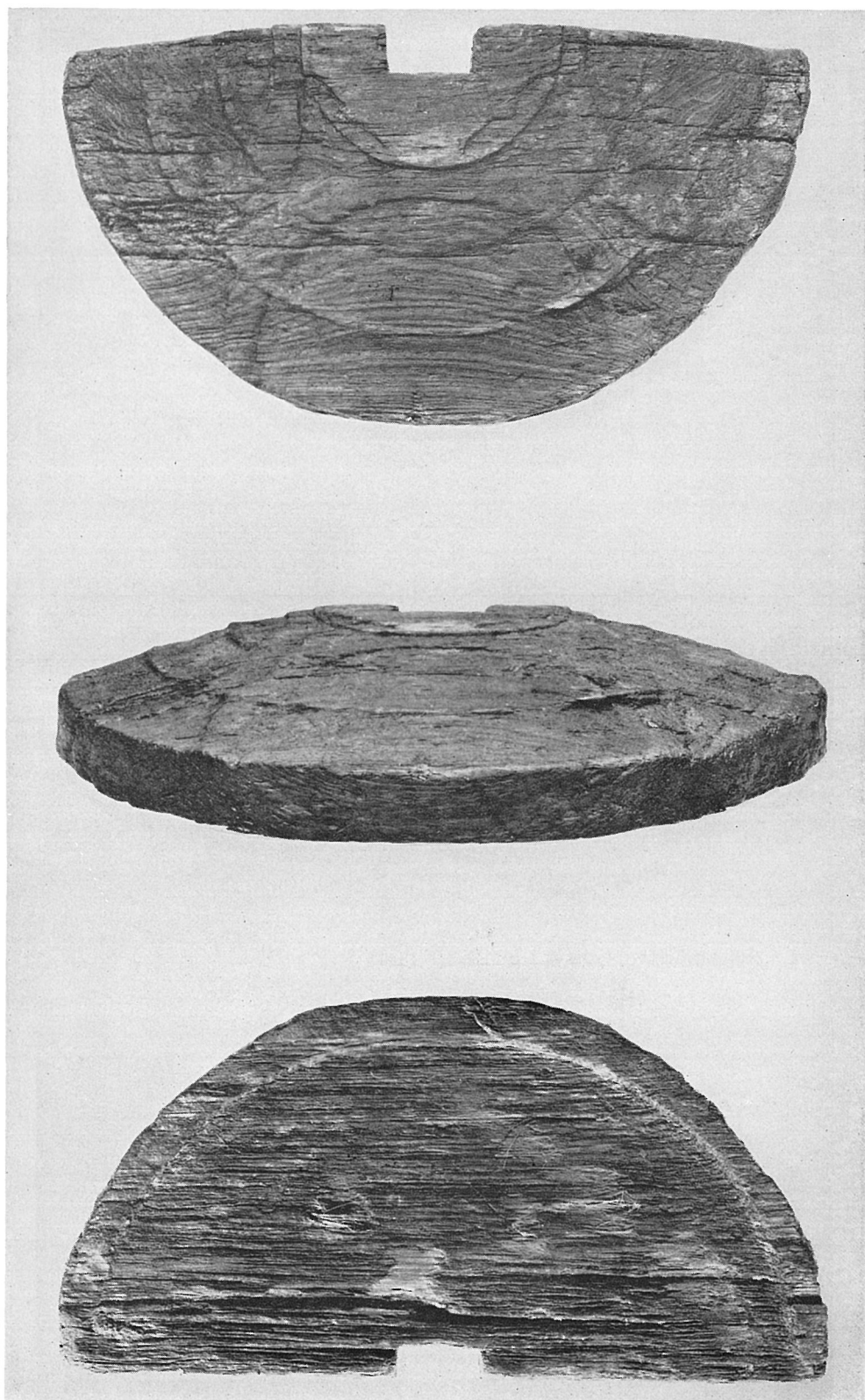
(福尾正彦)



1 百舌鳥耳原北陵出土の埴輪（上 外面，下 内面）



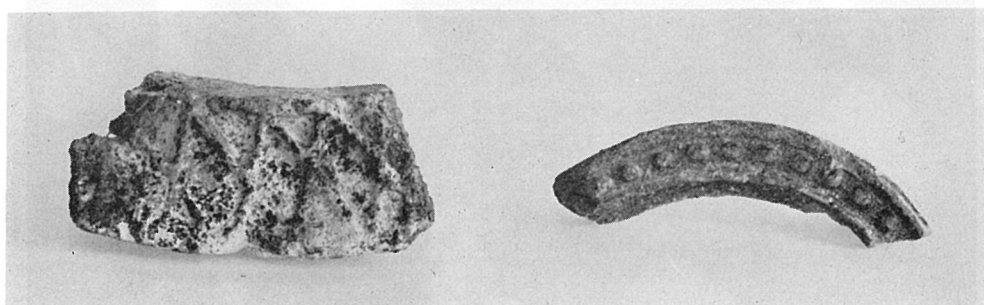
2 成菩提院陵遠景（東南東から，駐車場は手前の部分）



成菩提院陵駐車場出土燈台台座（上 上面，中 側面，下 下面）



1 成菩提院陵駐車場出土燈台台座（細部，中央左が漆残存部分）



2 成菩提院陵駐車場出土土瓦（左） 鏡瓦（右）



3 白鳥陵埴輪露出状態（A地点北側）